

# 幼児期の学びの芽生えを踏まえた1年生の国語科授業

～「おおきなかぶ」授業実践 教師の働きかけに着目する～

大阪市立古市小学校 教諭 八瀬 宗子

奈良教育大学大学院教育学研究科 専門職学位課程 教職開発専攻

## 1. はじめに

新学習指導要領の中に『特に、小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがあるとの指摘がなされている』とある。就学までに積み上げてきた幼児期の「ことば」について小学校教員がより理解し、学びの芽生えの姿を小学校の教室での学習へと繋げていくための手立てを探ることの重要性を感じる。

低学年の児童の「ことば」の指導の核心は、一次的ことばと二次的「ことば」をしっかり結びつけてやること(岡本1985)である。岡本氏によれば、二次的「ことば」の習得に係る言語的環境の変化への対応は「苦しく困難な作業」であるという。であるとするなら、この橋渡しをする1年生担任の役割や手立てを明確にすることが必要ではないだろうか。ここでは、「おおきなかぶ」の授業展開について考え、国語科授業の中で語彙の量と質を高める方法を探りたい。

- \*一次的「ことば」… 主として現実的な生活場面で具体的な状況の中、よく知っている相手に差し向けられる「ことば」
- 二次的「ことば」… あることがらについて、実際におこる場面から離れたところで状況の文脈には頼らず抽象化された聞き手一般を想定して使われる「ことば」

## 2. 方法

奈良教育大学附属幼稚園の年長児の日々の保育観察などから、幼児の遊びや活動の様子を捉え考察し、幼児の姿を踏まえた小学校での授業展開の在り方を提案し、6月下旬に古市小学校1年生で実践をお願いした。授業観察やワークシートなどの資料や授業者からの聞き取りなどから検証する。

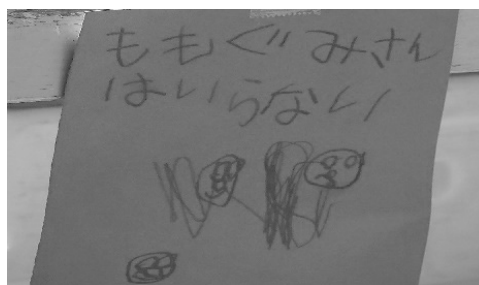
## 3. 園生活の中での学びの芽生えと捉えられる姿

### ①文字で伝えたい幼児の姿

子どもたちは、日常的に文字を伝えるための道具として使おうとしている。ひらがなやかたかな、時には記号やイラストなども混ざっているがその有用性について了解

している。何かを伝えるために書き記す、とどめるための言葉を活用する場面が多くあった。

看板や伝言など、文字を伝えるための手段として積極的に使おうとしている。



【ここはあぶないよ】年少組さんに絵でもわかるように

### ②アイデアを出し合い問題を解決しようとする姿

具体的な生活場面の中で課題に出会えば幼児たちは話し合いを始める姿が多く見られた。それは、それぞれに思い付きを無秩序的に話し出している感じではあるが「どうしてだろう」「何とかしたい」という意識には、必ずと言っていいほど、アイデアを交流する姿(思考している姿)があった。また、その無秩序に見える話し合いの中に、有効な大人の働きかけがあると、話し合いは一気に進みだす。大人の働きかけとは「どうしてそう思ったの」という根拠を問うもの、友だちの考えとつなぐもの、言葉を補強するもの、があった。(大人とは教師や用務員さん、給食調理員さんなど)



【シャボン玉液の濃度を調整】二人で話し合う

うまく膨らまないシャボン玉遊びの中で少人数で試行錯誤していた。遊びがひと段落してから、部屋に戻り以下のような全体での話し合いもなされていた。

- T シャボン玉膨らんだ?(できなかった子多数)  
 C 水多すぎたんちゃう?  
 T どうして、水が多いとダメなの?  
 C 入れすぎると弱っちゃう、あわになる力が弱いってこと。  
 T 力が弱いってどういうこと?  
 C あわが伸びへんようになるってこと。水が大事。  
 T 水の量が大事ってこと?  
 C 口も。口を小さくしてそっとふかな、あかん。

### ③絵と関連付けようとする姿

絵本の読み聞かせの時間は集中してお話を聞き絵を見ている。絵が物語る部分「あそこに描いてある」などのつぶやきも多く見られる。写真絵本を読んだ後、クイズをして楽しんでいた時のやり取りである。根拠をもって読もうとする姿がうかがえる。

- T チンアナゴは、何を使って砂に穴をほるのかな  
 (三折で拳手)  
 C やっぱり。思った通り。  
 T しっぽ。正解、よかったね。  
 C だってな 上向いてた。  
 T みんなに言って。(前に出て話させるように迎える)  
 C だってな、絵本であなごいつも上向いて砂に刺さってるみたいやったやろ、しっぽの先で穴を掘る方がやりやすいから。

## 4. 手立てと仮説

以上のような幼児期の姿を踏まえ、国語科の授業で、  
 ・読みの課題を提示し「なぜ○○だろう」についてペアで自由に話させる。その時、先生も話し合いの一員であるように参加し、言葉を引き出したり補強するような支援の仕方をする。  
 ・書き言葉として文字で書き表す前段階として、絵とも併用しながら考えたことを書く活動を取り入れる。  
 ・絵や生活経験と繋げて考えるように促し、自分なりの根拠をもって話ができるようにする。  
 を手立てとし、指導計画を提案した。

(仮説ア) 問題解決場面で周りの友だちとの「こしょこしょタイム(少人数で話し合いの時間)を設定し、一次的ことばでの対話を重視することで、二次的ことば(全体へ向かってのより抽象化、一般化されることば)に繋げることができる。

(仮説イ) 文字だけでなく、絵も考えていることを伝える手段として活用することで、二次的ことば(書き言葉)で伝えようとする意識化を図ることができる。

(仮説ウ) 物語の論理性を求めることで、根拠をもちながら想像を膨らませる力がつく。

## 5. 「おおきなかぶ」授業へ

この時期に付けたい言語の力である「語のまとまり」「想像する力」を念頭に置くため、単元目標は以下のよう設定した。

○場面の様子を想像しながら物語の展開を楽しんで読み、好きなところを音読することができる。

また、ことばへの意識を高めるために指導計画において重点を設定した。

(指導計画)

時	学習内容	指導の重点
1	・全文を通読。かぶについて話し合う。 (リズムよく音読をする 役割読みなど) ・登場人物を確かめ、誰が何をしたかを確かめる。 ・場面を確認し、内容の大体をつかむ。	○語彙をふやす 〴〵かぶって知ってる?
2	・かぶが大きくなったことについて話し合う。 「とてつもない」の言葉の意味を話し合い、絵で確認しながらこのお話の中での大きさについて共有する。 ・おじいさんがしたお世話について自分の経験をもとに考える。	○論理性の中で想像を広げる 〴〵だから、とてつもなくおおきなかぶができたんだ
3 4	・場面ごとに登場人物になって、呼びに行く言葉を考えたり、動作化などをして演じたりして楽しむ。	○ことばを考える (動作化して確かめる、想像を広げる) 〴〵「うんとこしょ、どっこいしょ」同じ言葉でもちがうね
5	・全体の話を振り返り、「それでも」「まだまだ」「まだまだまだ」などのつなぎ言葉に着目しながら、どんなふうに音読したいかを話し合う。	○ことばを考える (つなぎことばに着目する) 〴〵ぬけないことは同じなのに「それでも」「まだまだ」(等)ちがうことばだね
6	・「やっ」とのことばに着目しながら、前時と比べながらかぶが抜けた喜びを想像する。 ・抜けたときの登場人物の思いを書いたり、簡単な続き話を考えたりする。 ・グループで音読大会の発表の打ち合わせや練習をする。	○ことばを比べる (つなぎことばに着目する) 〴〵「やっ」とぬけてよかったね
7	・音読大会を開き、友だちの表現のいいところを見つけながら聞く。	○はっきり読む 〴〵勉強したから上手に読めるね

## 6. 授業の実際

(仮説ア)

### 「こしょこしょタイム」親密な関係の中での対話

読みの課題「どうしてかぶは大きくなったんだろう」をまずは隣同士で話し合った。「こしょこしょタイム」としていたので、二人で気楽に思ったことを口にして相談ができた。教師は席を回りながら話し合いに参加して楽しい雰囲気だった。直接的な対話に教師が関わり合いを持ちながら言葉を補強したり、促したりする役割を持つようにした。

- C 水をあげたからやんな、
- C いっぱいあげたんちゃう?
- C たねまいたからやん
- C たねが大きかったんか?
- T なに、なに?おもしろいね、たねに秘密がありそうなん?  
(話し合いの一人として、たねについて聞いたことで以下の発言が引き出された。)

- C 土の中でたね、くっついたんかな。(たねへの思いの膨らみ)
- C ひりょうやったからちがう?(たね以外について考えが及ぶ)
- T あさがおのお世話したから、思い出したのね。  
(生活経験と結び付けたことにより根拠となっていく。)
- C やっぱ、水やる。(水が大事やる)
- C あさがおのお世話で、ひりょうもやったやん。

「こしょこしょタイム」の後、全体での話し合いを行った。この時は、挙手をしながら話し合いが進められ発言者は全体に向けて話すことができていた。話しぶりも少ししかしこまった話し方になり、二次的ことばに移行が図られていた。

- C おじいさんが「おおきいかぶになれ」って言ったからです。
- T はあ、そうやった、そうやった。言ってみて。⇒口々にうん?まだ、言ったことばあったね。  
指名読で「あまいあまいかぶになれ…」の部分を読む
- T Aさん、力が入ってる読み方ね。  
Bさん、やさしいから心がこもってるってわかる読み方ね。(等)  
(音読の仕方に意味付けをして知らせている)
- C おまじないみたいやな!
- C 根が土をいっぱい捕まえたから、大きくなったと思います。
- T どういうこと? (教師が聞いてことばを補強)なるほど、土から栄養をもらってあさがおのとき根の観察したね。(教師が手を伸ばす動作化をして根が栄養捕えていることを表現する)こんな風に伸びて伸びて土の栄養を捕まえてるのね。
- C そらなかなか、ぬけへんわな。(つぶやき)

教師の働きかけは、生活経験や具体的な場面を想起させたり、一緒に「なるほど」や「おもしろいね」という感動を共感しながらそのことばそのものを代弁したりしていた。また、音読で本文に戻って確かめることで本文に沿った読みを意識させることもできていたように思う。  
(仮説1)

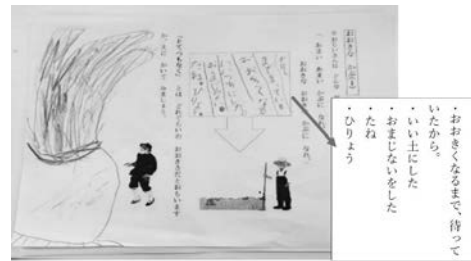
「絵と文で伝える」書き言葉へのなだらかな移行  
「かぶが元気ってなんでわかるのかな」と、発問が続く。

葉っぱが多い、葉っぱの緑が濃い、かぶがつやとして、ピンとしてる、くったりしてない、等の意見が出された。

「なるほど、おじいさんがお世話をして、あまくて、元気のよい、とてつもなく大きなかぶができたのね」となったが、ここで「とてつもなくってどのくらい?」と発問があった。話し合いの後、絵を描く前に再度聞くことで、初読では「地球ぐらい」などと深い考えはなく、とてつもないということばのみで想像していた子どもたちが

- ・おじいさんが見上げるくらい
- ・ふつうのかぶの100倍くらい
- ・あ、でも後でぬけやなあかんからこのくらい

などと、大きさについても文脈に沿いながら想像していた。かぶは、葉っぱの緑を濃く塗ったり、根を書き加えたり、光っていたり、それぞれの表現に思いがあり、言葉と絵でおじいさんのお世話とかぶの育ちをワークシートに想像して書くことができた。



(仮説ウ)

### 「根拠を持ちながら想像を広げる」なぜを問う

4時間目は、前時間を受けて、「うんとこしょ、どっこいしょ」が登場人物分あることをおさえるところから始まっている。子どもたちは、そのそれぞれの「うんとこしょ」がことばが同じでありながら、違いがあることを話し合い、絵を見ながらだんだん人数が増え、声が強まることを音読で確かめた。

ここでは、それぞれの登場人物が次の登場人物を呼びに行く場面を想像し演じて楽しむことをめあてにしていたが、「なぜ、○○を呼びにいったのかな」と理由を問うことにより、その二人の関係性や登場人物のキャラクターの設定に想像が及んでいた。

- T なぜ、まごは犬を呼んだのかな  
 C 力が足らんかったから。  
 T なんて、他の人じゃだめなん?  
 C まごと犬は仲良しやから 犬ひまそうやったんちゃう?  
 C まごが犬にえさあげてるんちゃう?  
 C あ、そうか。食べたとこって知ってるから力出るって思ったんか。  
 C さんぼも連れてって行ってるんちゃう?それで体力つけてんねん。  
 C かむ力もつよいんちゃう?  
 T まごは犬がいいと思ったんやね

声の大きさの強まりは力の増加だと話し合いが高まり、力という言葉キーワードに想像が膨らんだ。ねずみの場面では、「ねずみは小さいのに力が増えたの?」と、教師が揺さぶりをかけた。「小さくても力があるねずみだったから呼んだ」、「ちょこちょこして元気そうなねずみだったから呼んだ」などの意見が出され、最終的に「ねずみは小さいけれど、ねずみのおかげでぬけた」と、民話の面白さの神髄をついているかのようなつぶやきが見られた。

論理的に読むことに関わる発問について、前年度の筆者の実践と本実践とを比較すると以下のように整理される。

	前年度	本実践
初めの場面	・登場人物は何人ですか。 <b>【順序】</b> ・どんなお世話をしましたか。 <b>【想像】</b> ・とてつもないってどういう意味? どのくらい大きいってことかな。 <b>【言葉の意味】</b>	・おじいさんはなぜおばあさん呼んだのですか。(かぶをぬくために登場人物が増えることを押さえながら) <b>【論理性】【順序】</b> ・どうしてかぶは大きくなったんだろう。 <b>【論理性】【想像】</b> ・かぶが元気でなんでわかるのかな。とてつもないってどのくらい大きいのかな。 <b>【文脈に沿った意味】【想像】</b>
呼びに行く場面	・「うんとこしょ、どっこいしょ」どんな風に読むといいですか。 <b>【音読】</b> ・呼びにいくときの台詞を想像して書きましょう。 <b>【想像】</b> ・ぬけたときどんなふうに喜んだかな <b>【想像】</b>	・「うんとこしょ、どっこいしょ」同じ言葉だけど同じかな。 <b>【音読】【言葉の感覚】</b> ・なぜ、〇〇を呼んだのかな。 <b>【論理性】【想像】</b> ・なんで、「やっ」となんだろうね。「そして」でもよさそうなのにね。 <b>【論理性】【言葉の感覚】</b>

例えば、6時間目かぶがぬけた喜びの想像を膨らませる学習において前年度は、登場人物の気持ちを問うことで展開した。本年度の実践では「やっ」とのことばに着目し、話し合わせた。「そして」ではない「やっ」とのことばが使われている理由を、すごく大きかったから、苦労したから、6人分の力が合わさったから、すぐじやな

かったから、など活発に意見が出され、かぶがぬけた嬉しさを読んだことに繋げながら、想像を膨らませることができた。

他も表にまとめたが、本実践における発問は「なぜ」を問うたり、言葉に着目させたりすることで思考が働き、想像を広げるときにもそのお話の中のことばから逸脱しないような展開ができていた印象を持つ。

## 7. まとめ

授業者は、「今まではこの時期の子どもたちに、端的に答えられるような発問をしてきたが、今回「なぜ」を問うことで、子どもたちの思考が動くことを感じた」と話した。観察した筆者も同じことを感じた。入学して字を覚えたばかり、教室での学びに慣れたばかりである、この時期の子どもたちの持つ力を、今まで十分に活かしきれていなかったのではないだろうか。また、授業者はこうも話した。「子どもたちは話したいこと、考えていることがいっぱいある。問題解決場面に出えば、自分の経験や友だちの考えを統合しようする力がある。このことを実感した実践だった。」

幼児期において、先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりしながらことばを広げてきている。その幼児期との接続として先生や友だちと親しく話すための意義づけとなるような、「読みの課題」を設定し問題解決型の読み方をすることは、この時期にも十分に可能であろう。

1年生の学級担任は、この一次のことば(直接対話)の重要性をしっかりと認識する。そして、幼児期から入学後へとことばの学習を深化するには、話の論理性や論理的にことばに着目させることが重要ではないだろうか。子どもたちは問題解決場面に出会い、絵や生活経験、友だちの話を助けとし、論理性から逸脱せず想像が膨らむ。そのような積み重ねが言語感覚を豊かにし、低学年の国語科授業において語彙の量と質を高めることに繋がるのではないだろうかと考える。

## 参考文献

- 『小学生になる前後 新版』岡本夏木 岩波書店 (1995)  
 『ことばと発達』岡本夏木 岩波新書 (1985)